
水戸中央病院

薬剤師卒後研修プログラム

1. プログラムの名称

水戸中央病院薬剤師卒後研修プログラム

2. プログラムの目的と特色

本プログラムは、水戸中央病院に勤務する薬剤師が、基礎から応用までの知識・技能・態度を体系的に習得し、患者中心の医療を実践できるよう育成することを目的とする。

1～3年目では基本的業務の定着を図るとともに、日病薬病院薬学認定薬剤師の取得に向けた基礎力を養い、4年目で認定取得が可能となるよう段階的に学習を進めていく。

その上で、4～5年目以降は抗菌化学療法認定薬剤師や日本糖尿病療養指導士などの専門資格取得も視野に入れ、より高度な専門性の習得を目指す。

また、地域医療・チーム医療・在宅医療など多様な場面で医療安全と薬物療法を支える薬剤師の育成を目指す。

3. 研修プログラム責任者

研修プログラム責任者は薬剤科長とし、研修の企画・運営・評価を統括する。

責任者は研修原案の作成、進捗管理、到達度評価および院内報告を行い、研修者の育成支援を担う。

4. 就労環境

- 勤務病院の宿舎：あり（希望により可）
 - 薬剤師賠償保険：病院で加入
 - 学会・研究会等への参加：可（交通費・宿泊費支給）
 - 指導薬剤師資格：実務実習認定指導薬剤師（3名）、抗菌化学療法認定薬剤師（1名）、骨粗鬆症マネージャー（1名）、日本糖尿病療養指導士（1名）、日本薬剤師研修センター認定薬剤師（1名）
 - 取得可能な認定・専門資格：日本薬剤師研修センター認定薬剤師、抗菌化学療法認定薬剤師、実務実習認定指導薬剤師、骨粗鬆症マネージャー、日病薬病院薬学認定薬剤師など
-

5. 指導体制

指導薬剤師は勤務歴5年以上、指導歴3年以上の者で、原則日病薬病院薬学認定薬剤師資格を有する者が担当する。

研修到達度は「評価シート」に基づき指導・助言・面談を実施し、以下の基準で評価する。

- 0：未実施／理解不足
 - 1：指導下で実施可能
 - 2：独力で実施可能
 - 3：他者を指導可能
-

〈研修プログラム〉

1. 病院の概要

- 病院名：水戸中央病院
 - 所在地：茨城県水戸市六反田町 1136-1
 - 診療科目：内科、呼吸器内科・外科、循環器内科、糖尿病・内分泌内科、人工透析内科、消化器外科、肛門外科、整形外科、脳神経外科、形成外科、泌尿器科、皮膚科、リハビリテーション科、麻酔科、下肢静脈瘤外来、乳腺外科
 - 病床数：一般急性期 65 床、地域包括ケア病床 25 床、療養病床 88 床
-

2. 研修プログラムの到達目標

薬剤師としての倫理観と使命感を持ち、医療安全を意識したうえで、医薬品の専門家として患者の命と健康を守る。

3 年目までに基礎的臨床能力を確立し、5 年目までにチーム医療・地域医療・在宅医療へ貢献できる薬剤師を目指す。

3. 研修項目

（1）オリエンテーション

- 研修目標：医療機関における医療職の臨床研修の概要を理解する。
- 研修期間：入職後 3 日程度
- 研修方法：薬剤科内・院内見学、薬剤部業務説明を行う。

（2）調剤業務

- 研修目標：個別化医療を実現するための調剤業務遂行とそれに必要な知識とスキルを習得する。
医薬品情報だけでなくカルテ情報や検査値を確認し、医師の治療方針と患者の状態を考慮した上で、適切な調剤を行うことを身につける。
この研修を通じて、薬物治療の有効性・安全性の評価能力を高め、処方箋の正確な記載事項を理解した上で、医薬品の適切な使用を実践するスキルを身に付けることを目指す。
- 研修期間：0～3 か月目
- 研修方法：対象とする医薬品は内服薬（錠剤、散剤、液剤他）・外用剤（軟膏、液剤、点眼（鼻）剤、貼付剤他）・注射剤（輸液含む）等取り扱う全ての医薬品とし、計数調剤、散剤、粉碎、一包化、軟膏調製、液剤、注射薬等一通りの調剤を実施する。
研修においては、「医薬品の供給と管理業務」の研修と併せて、麻薬調剤も実践する。
院内外来処方における患者への薬剤交付時には、積極的に患者への服薬指導を実践させ、コミュニケーション能力の向上も図る。

研修初期(0～1か月)

薬の取り揃え前に、対象患者のカルテにより基本情報を確認した上で、薬物代謝に影響を与える検査値(腎、肝機能)も確認し、処方監査することを意識付ける。

処方監査時に生じた疑義については、指導薬剤師へ疑義や照会事項を報告の後、医師への疑義照会を実践する。

中期(1～2か月)

新たな処方や処方内容が変更された際にはカルテを確認し、患者の病状の変化の把握や医師の処方意図の確認を意識付ける。また、対象患者の検査値のほか、インタビューフォームや最新の治療ガイドライン等を確認し、処方監査をすることが重要である。

医師への疑義照会は研修者自身の判断で行うこととしてよいが、慣れないうちは指導薬剤師への報告を求めること。

後期(2か月目以降)

カルテや病棟薬剤師から得た患者情報(病態・生理的特性)を基に、処方薬剤に対する総合的な評価を行い、多数の併用薬を服用する(ポリファーマシー)患者の薬物療法の再検討や患者のアドヒアランス向上のための代替薬の提案や調剤上の工夫を主体的に実践するよう配慮する。

(3) 医薬品供給・管理業務

- 研修目標：医薬品の発注・在庫・期限・温度管理を理解し、適正管理を行う。
- 研修期間：3～12か月目
- 研修方法：医薬品の品質の確保を含めた供給体制を理解し、院内の使用状況を踏まえた適正な在庫管理(医薬品の発注、納品時の検品、温度・期限管理)を実践する。

医薬品に付随する機器類や説明文書の管理業務、医薬品の廃棄、記録及びその手続も行えるよう配慮する。

医薬品の供給不安定への対応については、製薬企業や医薬品卸からの医薬品供給情報をいち早く入手し、病院での使用量から在庫の消尽を推測した発注や同種同効薬等の代替品への採用薬の切替えの判断が出来るよう指導薬剤師と検討を行う。

麻薬、向精神薬、毒劇薬等の特別な管理を求められる医薬品の流通・保管・施用・廃棄等の管理と取扱いに関する各種の法制度及び業務内容を理解し、マニュアルに従うことはもちろんであるが、それぞれの医薬品の特性に応じた管理方法を実践することが出来るよう指導を行う。他職種に指導・教育する立場であることを認識することが重要である。

麻薬管理では、規制を外れた管理方法や盗難・紛失・所在不明等が事件や乱用など社会的に大きな影響をもたらすことを深く認識させ、麻薬管理者の指導の下に実践する。その際には、行政への各種届出や免許管理等についても実施するよう配慮する。

(4) 医薬品情報(DI)

- 研修目標：情報の収集・評価・提供を行い、安全な薬物療法を支援する。
- 研修期間：6～12か月目
- 研修方法：情報提供業務

医師・看護師等からの投与量や相互作用等の日常的な問合せに対して、情報提供を行う(受動的な情報提供)とともに、院内医薬品情報誌(DIニュース)の作成や、患者や地域住民向けお薬情報資料の作成等を行

い、薬剤部からの積極的な情報発信（能動的な情報提供）の必要性について認識させ、信頼性の高い情報源を選択し、薬学的見地から精査を行い、受け手のニーズや時間的制約に応じた形に加工して情報提供を行う。

副作用報告等

医療関係者には、健康被害（副作用、感染症及び不具合）の情報を厚生労働省等へ報告することが義務付けられている。医師へ副作用等報告に係る啓発を行うとともに、収集した副作用等情報の評価を行い必要に応じて報告を行う。

医薬品副作用被害救済制度・生物由来製品感染等被害救済制度については、その趣旨を理解し、対象となる患者が発生した場合には、制度の概要説明や申請手続等の支援を行う。

院内採用医薬品の承認手続等

新規採用に当たっては、その医薬品の有用性を示す資料の収集、院内での必要性を示す理由書等を吟味し、採用可否の検討に係る資料作成を行い、新規採用薬の承認に関する手続の理解や委員会の開催が出来るよう支援を行う。

削除品目の検討等、適正な在庫管理に資する方策も検討する。

（５）病棟業務

- 研修目標：入院患者と直接接することにより、患者の病態に応じた服薬指導やフォローアップ、コミュニケーションのスキルを高める。

持参薬の服薬状況等の聴取を通じた薬物治療に関する問題点（ポリファーマシー等）の抽出、服薬計画の立案、入院患者へ服薬指導等を通して薬学的知見に基づく積極的な介入や提案を実践する。

退院後の適切な薬物治療の継続のため、退院時カンファレンスへの参加、情報提供書の作成・提供等により、地域医療(多職種)との連携を実践する。

- 研修期間：１２か月目以降
- 研修方法：事前研修

患者への指導を行う前に、薬剤管理指導の位置付け、対象患者、指導のタイミング、指導の流れ、カルテへの記載方法等について指導薬剤師による講義を行う。

病棟における担当患者との関わり

病棟業務を実践する診療科は一般的な内科・外科領域とするが、複数の診療科を経験し、診療科ごとに症例報告を行えるように検討すること。

患者入院時

持参薬とお薬手帳のみで確認するのではなく、患者やその家族と面談を行い、持参薬(要指導医薬品や一般用医薬品を含む)の服薬状況、アレルギー情報、副作用歴、薬剤管理方法等を聴取する。

患者との面談について、事前に指導薬剤師より患者やその家族への対応方法や配慮事項についても十分に指導・助言を行う。

患者は必ずしも処方どおりに服用しているとは限らないため、用法・用量についても確認し、患者プロフィール等の整理を通じて、疾患の病態生理、薬物の作用機序を踏まえて総合的に患者のアドヒアランスの評価を行う。

患者の薬物治療に関する問題点を抽出し、問題解決のため、代替薬の提案を含む服薬計画の提案を実践することとし、カルテへの記載を行い他職種と共有を行うことが重要である。

服用薬剤数が多く、薬物有害事象のリスク増加や、服薬過誤、服薬アドヒアランス低下等につながる状態（ポリファーマシー）である場合は、服用回数の減少や配合剤の導入のほか、治療の優先順位に沿った治療方針になっているか等各薬剤を再考し、薬剤師の視点から減量、中止を提案することも重要である。

患者入院中

研修初期においては、服薬指導の対象患者は指導薬剤師が選定する。

概ね5名実施後は、研修者がより主体的に薬剤管理指導を実施するが、指導薬剤師は対象患者のカルテの記載等により、研修者が患者情報の収集、薬物治療に対する評価、服薬指導、他職種へのフィードバックが適切にできているか確認し、必要に応じて指導・助言を行う。

入院患者への説明と服薬指導では、服用方法、薬剤の保管方法、器具(デバイス)の使用 방법等を含めた患者への情報提供と薬学的知見に基づく指導を実践することが重要である。

特に抗がん剤などのハイリスク薬の投与については、投与前に患者やその家族に詳細に説明を行うとともに良好な信頼関係を構築することが重要である。

初回指導、2回目以降等継続的な関与を通して、薬剤の有効性・安全性の評価や副作用発現の有無等、患者の主観的データ(S)、客観的データ(O)を確認し、効果的な薬物治療の実施とアドヒアランス向上のための方策を考えることが重要である。

治療開始後は、定期的に患者状況を確認(ハイリスク薬を服用している患者は、毎日副作用の発現を確認)し、投与後の有効性や副作用モニタリング、投与量、投与方法、相互作用等の薬学的管理を行い、必要に応じてバイタルサイン・フィジカルアセスメント等を実施し、投薬の妥当性を評価する。

必要に応じて、処方変更の提案も実施すること。これらの一連の流れをカルテに正確かつ論理的に記載し、医師等へ共有することも重要であり、さらに、薬剤師の介入による患者の治療アウトカムの変化を明確にすることが望ましい。

TDM(治療薬物モニタリング)を必要とする薬剤を使用している患者については、TDMの必要性の有無を考え、医師への提案を行う。→(12)「TDM」参照

退院時

退院後、服用する薬剤の情報を患者自身で管理し、適切な服用の継続に繋げることが大切であるため、服用しやすい剤型・剤数の見直しを行うことも必要である。

患者の退院決定後、退院時に服薬指導を必要とする場合には、退院時処方入力の有無や不足薬剤がないかなどの確認を実践する。

退院時カンファレンスが行われた際には、積極的に参加し、退院後の薬物治療の継続のため、転院先病院や調剤薬局薬剤師のほか、介護支援専門員(ケアマネジャー)や訪問看護師等、地域における多職種との連携の必要性を理解し、必要な場合には、地域調剤薬局や病院の地域連携室等への働きかけを行う。

患者の退院後も、転院先病院や地域の調剤薬局における効果的な服薬指導の継続に繋げるため、入院時の治療経過や調剤上の工夫、退院時処方、服薬管理についての情報等を記した情報提供書(薬剤管理サマリー)を作成し、転院先病院や地域の調剤薬局又は患者・患者の家族へ提供する等の連携を実践する。

(6) 医療安全

- 研修目標：医療の質を担保し、患者及び医療従事者にとって安全な医療を提供できる。特に、医薬品の安全管理体制の確保のため薬剤師として主体的な役割を果たす。

医療安全は場所を問わず、全ての業務に付随する事項である。インシデントを未然に回避するために、危険予知と必要な確認を通じ、環境整備や医療技術の活用等の業務の工夫を行い、インシデントが発生した際は職員間においてコミュニケーションを図り、事例を共有し被害を最小化するとともに、再発防止

策を検討することが重要である。

医薬品に関する医療安全対策は、特に薬剤師が重要な役割を担うべきであることを理解する。

医薬品安全管理を理解し、インシデント報告を実践する。

- 研修期間：研修期間中、随時行う。
- 研修方法：医療安全の実務について、医療安全担当者(医薬品安全管理責任者、医療安全管理者、リスクマネージャー等)の役割と医療安全対策に関するマニュアル・指針、インシデント発生時の対応(報告・連絡・相談等)と記録方法等について説明を行う。

特に医薬品の安全使用のためには、医薬品の採用、供給管理、調剤、患者に対する与薬・服薬指導に至るあらゆる過程において、安全を確保するための手順に基づいて業務を行い、必要に応じて手順を改善していく視点が必要である。

ヒヤリ・ハット報告、インシデントレポートについては、研修項目に限らず、経験したら必ず報告する。施設内で発生した医薬品に関連したインシデント数例(3例程度)について、医療安全担当者が行う原因の調査分析や対応策検討に参画させ、レポート等にまとめる。

(7) 感染制御

- 研修目標：医療現場に応じて感染症を発生させない環境整備や感染予防を実践する。感染症発生時(新興・再興感染症を含む)における感染拡大防止のための対応を図るなどの感染制御に努める。

標準予防策として手指衛生、個人防護具(手袋・マスク等)を適切に使用し、代表的な感染症の予防策の把握と適切な消毒薬を選択でき、他者に説明できることが求められる。施設内の感染制御管理体制を理解し、感染症発生時及び針刺し事故等の事例発生時における初期対応を行えることが重要である。

薬物治療に関しては、適切な抗菌薬の選択ができることが重要である。

- 研修期間：研修期間中、随時行う。
- 研修方法：病棟業務での実践において、抗菌薬選択の適否について検討する。

標準予防策として手指衛生、個人防護具(手袋・マスク等)を適切に使用し、代表的な感染症の予防策の把握と適切な消毒薬を選択、他者に説明をする。

院内感染対策チーム(Infection Control Team：ICT)の委員会やラウンド等にも参加する。

施設内の感染症例報告において、最低2例は抗菌薬の薬物治療について報告する。

症例報告では培養結果に基づく抗菌薬適正使用、投与量、投与方法、投与期間、TDMの測定結果等も記載する。

(8) 地域連携(病院と調剤薬局の連携)

- 研修目標：病院と調剤薬局の連携や地域連携の必要性を理解し、地域における患者中心の医療の実現に努める。

患者はその病期に応じて医療提供施設が選択され、また在宅での治療が継続される。いずれの場合でも地域の医療従事者が患者情報を十分に共有し、質の高い最適な薬物治療を提供する必要がある。

- 研修期間：6～12か月目
- 研修方法：調剤薬局から報告される服薬情報提供書(トレーシングレポート)について、その記載内容の妥当性や重要性を評価し、医師へのフィードバックまでの実践を行い、また必要に応じて調剤薬局への情報提供を行う。

研修者にはどういった情報が患者の薬物治療の有効性と安全性の向上につながるのかを考えさせ、トレーシングレポートを通じて質の高い情報提供を行うことが出来るよう支援する。

調剤薬局からの疑義照会への対応では、その照会内容を評価し、医師への問合せを迅速に対応できるよう訓練する。

調剤薬局と病院双方の立場から疑義照会の意義や有効性を考えるとともに、病院薬剤師と調剤薬局薬剤師の連携の重要性を認識する。

退院時カンファレンス、退院処方に関する薬剤情報提供文書の作成等、退院時における転院先病院、地域調剤薬局等への情報提供等の地域連携業務については、「(5) 病棟業務」を参照すること。

(9) 無菌調製

- 研修目標：適切な無菌的混合調製を理解し実践するスキルを身に付ける。
注射剤(抗がん剤、麻薬を含む)や TPN(中心静脈栄養)の無菌的混合調製に必要なスキルだけでなく、知識の習得も必要である。
医師や看護師とも連携し、患者の病態やニーズに応じた輸液管理に対応できる必要がある。
- 研修期間：3～6 か月目
- 研修方法：注射剤(抗がん剤を含む)や TPN の無菌調製を行うとともに、携帯型ディスポーザブル注入ポンプの麻薬調製も実践を行う。
抗がん剤ミキシング実践時は、曝露対策についても研修を行う。
単に無菌調製のスキルを身に付けることを目的とするのではなく、配合変化や輸液管理(体液管理、栄養管理)についても理解する。

(10) がん化学療法

- 研修目標：がん化学療法のレジメン管理や抗がん剤の調製、副作用や疼痛評価、支持療法薬の提案、投与計画への参画など基本的技能・知識を身に付ける。
効果的かつ安全ながん薬物治療を継続するためには、レジメンに従った投与スケジュールや経口抗がん薬の服薬管理、副作用や合併症への対応などが求められる。
- 研修期間：2 年目～3 年目
- 研修方法：がん種ごとのレジメンを理解し、処方監査を実践する。
外来通院治療室又は病棟において、薬学的観点から患者や家族に対してレジメンの説明を行う（経口抗がん薬の服薬指導を含む）。説明の際には、患者や家族の不安に配慮するなど適切に対応する。
患者の服薬状況や副作用の発現状況について、薬学的観点から確認を行い、副作用や疼痛評価、他の疾患の治療のために服用している薬剤との併用による影響等について総合的な評価を実践し、必要であれば医師へ支持療法薬、減量・休薬等の提案を行う。
薬剤師が実施した評価や提案についてはカルテへ記載し、他職種に共有し、投与計画変更等の議論にも参加する。

(11) 緩和医療

- 研修目標：生命を脅かす疾患による問題に直面している患者やその家族に対して、患者の状態に合わせた薬剤の提案や投与量の調節、麻薬の副作用の対応策等を薬学的見地から提案を行える。
- 研修期間：3 年目～4 年目
- 研修方法：疼痛、倦怠感等の身体的苦痛に加え、不安、せん妄などの精神心理的苦痛に対して、薬学的アプローチを行う。
麻薬に関しては、患者の状態に合わせてベース、レスキューの量を調整し、副作用の改善、鎮痛効果の増強等目的のため、適切な薬物療法について提案する。
経口摂取が難しい患者や認知機能低下患者への投薬においては、患者の症状や病態を考慮した上で、錠剤粉碎、簡易懸濁法、速報性錠剤、輸液等の適切な剤形選択や投与方法を検討し、他職種に提案する。
退院時を考慮して、在宅で可能な緩和ケアを考慮した投与経路や剤形変更を検討する。

(12) TDM 業務

- 研修目標：血中濃度測定に関する基本的知識や手順を理解し実践する。
薬物特性と患者個々の状態に適した薬学的管理を理解し、指導薬剤師の指導の下、投与設計・処方提案ができる。
- 研修期間：2年目
- 研修方法：TDMとは薬物の血中濃度を測定し、薬物ごとの有効血中濃度を指標として、最も適した投与量、投与間隔などを見出す一連の手順である。実臨床ではこれに加え、個々の患者の腎機能・肝機能などの生理機能や薬物に対する反応性の違いを考慮し、薬物治療の有効性を最大限に引き出し、リスクを最小限に抑えることが重要である。
有効血中濃度域が狭い薬剤や半減期が短い薬剤など TDM が有効とされている薬剤を投与されている患者について、薬物血中濃度測定の提案を行い、その測定結果を踏まえ、薬効や副作用の評価を行い、患者の生理機能や病状に合わせた適切な投与量について、医師への提案などを行う。

(13) 高齢者医療

- 研修目標：加齢に伴う生理機能の変化や高齢者特有の疾患や症状について理解した上で、薬学的管理・指導を行える。
- 研修期間：3年目～4年目
- 研修方法：多剤服用に関連した薬物有害事象のリスク増加、服薬過誤、服薬アドヒアランス低下につながる状態(ポリファーマシー)にある高齢者について、薬物療法の適正化を行う。
服薬アドヒアランスが低下している場合は、要因を確認し、剤形の選択、用法の単純化、管理方法の工夫、処方・調剤の一元管理等を行い、退院の際には転院先病院や地域の調剤薬局又は患者・患者の家族へ提供する。
医師の処方外で患者自身が使用する一般用医薬品や健康食品等の使用状況を把握し、処方箋医薬品との重複や、相互作用に注意し、本人のみならず家族に対しても適正使用について注意喚起を行う。
老年症候群の主要な症状(認知症、せん妄、褥瘡、寝た切り、排尿障害等)を有する高齢者に対し、薬学的管理ができるよう指導をする。
多数の疾患を抱える高齢者に対して、生理機能の変化や老年症候群を考慮した上で、処方提案する。

(14) 臨床研究

- 研修目標：研修の中で学んだ知識や技能を活用して、臨床研究を実施することで薬剤師としての科学的思考力を習得する。
- 研修期間：4年目以降
- 研修方法：研修の中で学んだ知識や技能を活用して、研修者自身が病棟業務研修の中で感じたクリニカル・クエスションに対する回答(臨床データ)を得るため、臨床研究計画案に基づき、倫理委員会への申請、承認後に実際に臨床研究を実施することは、薬剤師として科学的思考力を習得する上で有益である。
臨床研究計画の立案が可能な場合、指導薬剤師指導の下、以下の流れで研究に着手する。
 - ①研究課題に関する文献調査等の情報収集・解析
 - ②研究課題の設定、推論・論証方法の考究
 - ③研究計画に沿った研究の実施
 - ④研究成果の解析と考察

(15) 認定薬剤師の取得・更新

- 研修目標：日病薬病院薬学認定薬剤師の認定・更新を受け、より専門的な薬物治療に携われる人材を育成

する。

- 研修期間：入職から4年目程度、更新は認定後随時
- 研修方法：日病薬病院薬学認定薬剤師の認定要件を満たすよう、計画的に単位を取得し、認定試験に合格する。

（16）専門・認定薬剤師の取得

- 研修目標：本人の希望に応じて、抗菌化学療法認定薬剤師や日本糖尿病療養指導士などの各種専門・認定薬剤師を取得し、より専門的な薬物治療に携われる人材を育成する。
- 研修期間：4年目以降
- 研修方法：認定取得にあたっては、各学会等で取得単位等の要件があるため、適切な環境で研修等を実施する。

（17）文章・ITスキル

- 研修目標：日常業務のDIニュース作成、カルテ記載等により必要な文章力を向上するとともに、PC業務に必須なWord、Excelの能力を養う。
- 研修期間：6～9か月目
- 研修方法：日々の業務の中で作成される報告書・カルテ記載等を指導薬剤師と吟味し、文章力向上、Word・Excelの能力向上につなげる。

（18）院内における他職種との連携

- 研修目標：薬物治療の観点からチーム医療に参加し、他職種との関わり方を学ぶとともに、薬学的見地からの見解を発信する。
- 研修期間：3年目から4年目
- 研修方法：他職種との連携では、病棟カンファレンスへの参加や医師回診チームの同行等を通じ、医師の治療方針を身近に学ぶとともに、薬物療法について評価・提案を行う。

医療チーム(NST、緩和、褥瘡等)の活動についても、担当薬剤師と共に参加し、医師、看護師を始めとする他職種が行う患者ケアの視点を培い、多職種連携のためのスキルの習得やコミュニケーション能力の向上を目指すことが重要である。

多職種との相互理解により、チーム医療における薬剤師の役割や特性を理解し、薬剤師として積極的な介入や提案を実践する。

〈研修評価〉

各研修項目について、研修者は自己評価を行い、指導薬剤師が評価・面談を行う。

評価基準：0＝未実施、1＝補助的实施可、2＝独立実施可、3＝他者指導可

〈付記〉

本プログラムは、水戸中央病院薬剤部が中心となり、地域医療機関・薬局・介護施設と連携しながら継続的に見直し・改善を行う。

〈研修評価シート〉

1. 評価目的

各研修項目の到達度を定期的に確認し、研修者の成長状況を可視化することで、効果的な教育・指導を行うことを目的とする。

到達度は「自己評価」と「指導薬剤師評価」を組み合わせで実施する。

1～5 年目までに評点 2 を全項目達成できること、6～9 年目までに評点 3 を全項目達成できることを目標に研修を行う。

2. 評価時期

- 年度中間評価：毎年 10 月頃
 - 年度末評価：毎年 3 月頃
 - 臨時評価：必要に応じて随時実施
-

3. 評価項目一覧

次ページ参照

水戸中央病院薬剤師研修プログラム〈評価シート〉

中間評価日

年 月 日

年度末評価日

年 月 日

研修者氏名	
評価責任者氏名	

評価区分	定義	判定基準例
0	未実施	対象業務を経験していない、または理解が不十分
1	指導下で実施可	指導を受けながら手順通りに実施できる
2	独力で実施可	一連の業務を自立して遂行できる
3	他者指導可	他の職員に指導・助言が行える

No	研修項目	研修目標		
1	オリエンテーション	病院の概要を理解する		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師評価
		薬剤科周りおよび薬剤科内の設備配置を把握する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		薬剤科の1日のスケジュールについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
2	調剤業務	個別化医療を実現するための調剤業務遂行とそれに必要な知識とスキルを習得する。医薬品情報だけでなくカルテ情報や検査値を確認し、医師の治療方針と患者の状態を考慮した上で、適切な調剤を行うことを身につける。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師評価
		錠剤の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		分包機の取り扱いについて理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		水剤の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		散剤の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		軟膏の調剤手順・混合方法について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		内服・外用薬の鑑査が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		注射調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		注射の鑑査が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		麻薬の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		簡易懸濁法の可否について判断できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3

		<table><tr><th>評価項目</th><th>自己評価</th><th>指導薬剤師 評価</th></tr><tr><td>院内製剤の調製が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>血液製剤の調剤手順について理解し、実践する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>処方歴の確認が出来る(重複の有無チェック)</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>腎機能を正しく評価できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>肝機能を正しく評価できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>インタビューフォームの情報を評価できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>ガイドラインを確認することが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>処方された薬剤の適応有無について判断できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr></table>	評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価	院内製剤の調製が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	血液製剤の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	処方歴の確認が出来る(重複の有無チェック)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	腎機能を正しく評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	肝機能を正しく評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	インタビューフォームの情報を評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	ガイドラインを確認することが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	処方された薬剤の適応有無について判断できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3						
評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価																																	
院内製剤の調製が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
血液製剤の調剤手順について理解し、実践する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
処方歴の確認が出来る(重複の有無チェック)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
腎機能を正しく評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
肝機能を正しく評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
インタビューフォームの情報を評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
ガイドラインを確認することが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
処方された薬剤の適応有無について判断できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	
No	研修項目	研修目標																																	
3	医薬品供給・管理	医薬品の発注・在庫・期限・温度管理を理解し、適正管理を行う。																																	
		<table><tr><th>評価項目</th><th>自己評価</th><th>指導薬剤師 評価</th></tr><tr><td>適正在庫に基づいた医薬品の発注が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>医薬品の検品が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>麻薬の納品受け取りが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>麻薬の払出しが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>使用された麻薬の返却受け取りが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>毒薬の管理が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>向精神薬の管理が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>血液製剤の管理が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>薬事審議委員会について理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>医薬品の供給が不安定な場合、使用量から在庫の消尽推測や同種同効薬等への代替品への切り替え等を考えることが出来る。</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr></table>	評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価	適正在庫に基づいた医薬品の発注が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	医薬品の検品が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	麻薬の納品受け取りが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	麻薬の払出しが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	使用された麻薬の返却受け取りが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	毒薬の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	向精神薬の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	血液製剤の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬事審議委員会について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	医薬品の供給が不安定な場合、使用量から在庫の消尽推測や同種同効薬等への代替品への切り替え等を考えることが出来る。	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価																															
		適正在庫に基づいた医薬品の発注が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		医薬品の検品が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		麻薬の納品受け取りが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		麻薬の払出しが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		使用された麻薬の返却受け取りが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		毒薬の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		向精神薬の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		血液製剤の管理が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		薬事審議委員会について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		医薬品の供給が不安定な場合、使用量から在庫の消尽推測や同種同効薬等への代替品への切り替え等を考えることが出来る。	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
No	研修項目	研修目標																																	
4	医薬品情報（DI）	情報の収集・評価・提供を行い、安全な薬物療法を支援する。																																	
		<table><tr><th>評価項目</th><th>自己評価</th><th>指導薬剤師 評価</th></tr><tr><td>医師、看護師等からの問い合わせに対応する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>院内医薬品情報誌(DI ニュース)の作成が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>患者や地域住民向けお薬情報資料の作成が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr><tr><td>電子添文の改訂時に情報伝達を行うことが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr></table>	評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価	医師、看護師等からの問い合わせに対応する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	院内医薬品情報誌(DI ニュース)の作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	患者や地域住民向けお薬情報資料の作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	電子添文の改訂時に情報伝達を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価																															
		医師、看護師等からの問い合わせに対応する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		院内医薬品情報誌(DI ニュース)の作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
		患者や地域住民向けお薬情報資料の作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																															
電子添文の改訂時に情報伝達を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																	

		<table> <tr> <th>評価項目</th><th>自己評価</th><th>指導薬剤師 評価</th></tr> <tr> <td>収集した副作用等を評価し、必要に応じて報告をする</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬事委員会の資料作成が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> </table>	評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価	収集した副作用等を評価し、必要に応じて報告をする	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬事委員会の資料作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																						
評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価																																																															
収集した副作用等を評価し、必要に応じて報告をする	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬事委員会の資料作成が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
No	研修項目	研修目標																																																															
5	病棟業務	<p>入院患者と直接接することにより、患者の病態に応じた服薬指導やフォローアップ、コミュニケーションのスキルを高める。</p> <p>持参薬の服薬状況等の聴取を通じた薬物治療に関する問題点（ポリファーマシー等）の抽出、服薬計画の立案、入院患者へ服薬指導等を通して薬学的知見に基づく積極的な介入や提案を実践する。</p> <p>退院後の適切な薬物治療の継続のため、退院時カンファレンスへの参加、情報提供書の作成・提供等により、地域医療(多職種)との連携を実践する。</p> <table> <tr> <th>評価項目</th><th>自己評価</th><th>指導薬剤師 評価</th></tr> <tr> <td>薬剤管理指導の位置付けについて理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬剤管理指導の対象患者について理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬剤管理指導のタイミングについて理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬剤管理指導の流れについて理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬剤管理指導後のカルテ記載方法について理解する</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>持参薬鑑別報告書を作成出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>入院時面談を行うことが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>患者のアドヒアランス確認が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>患者の薬物治療に関する問題点を抽出出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>抽出した問題点を解決できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>ポリファーマシー対策について検討が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>患者情報の収集が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>服薬指導ができる(吸入薬・インスリン等含む)</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>他職種へのフィードバックを行うことが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>ハイリスク薬の薬剤管理指導が出来る(抗がん剤等)</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>患者のアドヒアランス改善策を提案できる</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>TDM の必要性の有無を検討出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>退院後の生活を考えた薬剤支援を行うことが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>退院時カンファレンスで多職種との連携が出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> <tr> <td>薬剤管理サマリーを作成することが出来る</td><td>□0 □1 □2 □3</td><td>□0 □1 □2 □3</td></tr> </table>	評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価	薬剤管理指導の位置付けについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬剤管理指導の対象患者について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬剤管理指導のタイミングについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬剤管理指導の流れについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬剤管理指導後のカルテ記載方法について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	持参薬鑑別報告書を作成出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	入院時面談を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	患者のアドヒアランス確認が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	患者の薬物治療に関する問題点を抽出出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	抽出した問題点を解決できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	ポリファーマシー対策について検討が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	患者情報の収集が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	服薬指導ができる(吸入薬・インスリン等含む)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	他職種へのフィードバックを行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	ハイリスク薬の薬剤管理指導が出来る(抗がん剤等)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	患者のアドヒアランス改善策を提案できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	TDM の必要性の有無を検討出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	退院後の生活を考えた薬剤支援を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	退院時カンファレンスで多職種との連携が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3	薬剤管理サマリーを作成することが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価																																																															
薬剤管理指導の位置付けについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬剤管理指導の対象患者について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬剤管理指導のタイミングについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬剤管理指導の流れについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬剤管理指導後のカルテ記載方法について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
持参薬鑑別報告書を作成出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
入院時面談を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
患者のアドヒアランス確認が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
患者の薬物治療に関する問題点を抽出出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
抽出した問題点を解決できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
ポリファーマシー対策について検討が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
患者情報の収集が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
服薬指導ができる(吸入薬・インスリン等含む)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
他職種へのフィードバックを行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
ハイリスク薬の薬剤管理指導が出来る(抗がん剤等)	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
患者のアドヒアランス改善策を提案できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
TDM の必要性の有無を検討出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
退院後の生活を考えた薬剤支援を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
退院時カンファレンスで多職種との連携が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															
薬剤管理サマリーを作成することが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3																																																															

No	研修項目	研修目標		
6	医療安全	医療の質を担保し、患者及び医療従事者にとって安全な医療を提供できる。 医薬品に関する医療安全対策は、特に薬剤師が重要な役割を担うべきであることを理解する。 医薬品安全管理を理解し、インシデント報告を実践する。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		医療安全担当者の役割について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		医療安全対策に関するマニュアルについて理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		インシデント発生時の対応について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		インシデント発生時の記録方法について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		インシデントレポートを提出できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		インシデント対策法を提案できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
7	感染制御	医療現場に応じた感染症を発生させない環境整備や感染予防を実践する。 感染症発生時(新興・再興感染症を含む)における感染拡大防止のための対応を図るなどの感染制御に努める。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		抗菌薬選択の適否について検討出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		標準予防策について理解できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		代表的な感染症の予防策を説明できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		細菌培養結果を見ることが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
8	地域連携	病院と調剤薬局の連携や地域連携の必要性を理解し、 地域における患者中心の医療の実現に努める。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		服薬情報提供書の記載内容について評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		服薬情報提供書について医師へフィードバックを行う	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		調剤薬局からの疑義照会対応が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		薬薬連携の重要性について理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3

No	研修項目	研修目標		
9	無菌調製	適切な無菌的混合調製を理解し実践するスキルを身に付ける。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		TPN の無菌的混合調製を行うことが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		抗がん剤の曝露対策について理解し、調製が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		携帯型ディスポーザブルポンプへの麻薬調製が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
10	がん化学療法	がん化学療法のレジメン管理や抗がん剤の調製、副作用や疼痛評価、 支持療法薬の提案、投与計画への参画など基本的技能・知識を身に付ける。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		がん種ごとのレジメンを理解できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		化学療法処方について処方監査ができる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		レジメンについて患者・家族へ説明が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		副作用の発現状況について確認が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		副作用や疼痛等について総合的な評価を実施できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		医師に指示療法や減量等について提案ができる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
11	緩和医療	生命を脅かす疾患による問題に直面している患者やその家族に対して、 患者の状態に合わせた薬剤の提案や投与量の調節、 麻薬の副作用の対応策等を薬学的見地から提案を行える。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		疼痛、倦怠感等の身体的苦痛を評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		不安、せん妄等の精神的苦痛を評価できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		評価にあわせた薬学的アプローチが出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		患者の状態に合わせた麻薬の用量について提案出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		麻薬投与による副作用の改善策について提案出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		患者に合わせた剤形選択や投与方法を提案出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3

No	研修項目	研修目標		
12	TDM 業務	血中濃度測定に関する基本的知識や手順を理解し実践する。 薬物特性と患者個々の状態に適した薬学的管理を理解し、指導薬剤師の指導の下、 投与設計・処方提案ができる。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		TDM が必要な薬剤投与患者に TDM の提案ができる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		測定結果を踏まえて薬効・副作用の評価が出来る	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		評価を元に患者に合わせた適切な投与量を提案できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
13	高齢者医療	加齢に伴う生理機能の変化や高齢者特有の疾患や症状について理解した上で、 薬学的管理・指導を行える。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		ポリファーマシーの高齢者へ年齢を考慮した介入	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		管理方法について工夫できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		適した剤形の選択、用法の単純化についての介入	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		多剤服用による服薬過誤防止についての介入	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		老年症候群の症状に対し薬学的管理が出来るよう指導	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		退院の際に介入について患者の家族等へ情報提供	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
14	臨床研究	研修の中で学んだ知識や技能を活用して、 臨床研究を実施することで薬剤師としての科学的思考力を習得する。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		研究課題に関する文献調査等の情報収集・解析	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		研究課題の設定、推論・論証方法の考究	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		研究計画に沿った研究の実施	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
研究成果の解析と考察	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3		

No	研修項目	研修目標		
17	文章・IT スキル	日常業務の DI ニュース作成、カルテ記載等により必要な文章力を向上するとともに、PC 業務に必須な Word、Excel の能力を養う。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		Word の基本的な使用方法を理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		Excel の基本的な使用方法を理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		一般的な文章作成ができる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
No	研修項目	研修目標		
18	院内における 他職種との連携	薬物治療の観点からチーム医療に参加し、他職種との関わり方を学ぶとともに、薬学的見地からの見解を発信する。		
		評価項目	自己評価	指導薬剤師 評価
		チーム医療における薬剤師の役割や特性を理解する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		他職種から患者情報について聴取できる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		他職種への依頼ができる	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		医師回診チームに同行し、薬物療法について評価する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3
		医師回診チームに同行し、薬物療法について提案する	□0 □1 □2 □3	□0 □1 □2 □3

5. 総合評価欄

- 指導薬剤師所見：_____
- 次年度への課題：_____

卒後研修イメージ

必須項目

選擇項目

1年目				2年目	3年目	4年目	5年目	6年目	7年目	8年目	9年目	
オリエンテーション												
調剤業務												
医療安全												
感染制御												
	医薬品供給・管理業務											
	無菌調整											
		文章・ITスキル										
	医薬品情報(DI)											
	地域連携											
	病棟業務											
	TDM											
	がん化学療法											
				院内における他職種との連携								
				緩和医療								
				高齢者医療								
						臨床研究						
						認定薬剤師の取得・更新						
						専門・認定薬剤師の取得						